

RUBeC 演習に参加して

内海 孝亮

Kosuke UTSUMI

電子情報学専攻修士課程 2016 年度修了

1. はじめに

私は 2016 年 8 月 13 日から 29 日まで、RUBeC 演習に参加した。この演習では龍谷大学北米拠点 RUBeC (Ryukoku University Berkeley Center) で約 2 週間、英語のライティングスキルとプレゼンテーションスキルについて学んだ。また、英語学習以外には企業・大学訪問があり、アメリカの製造現場と大学を見ることができた。そして普段の生活では、滞在先がホームステイということもあり、一般的なアメリカの生活に触れることができた。

2. 演習内容

RUBeC 演習では、英語での論文作成やプレゼンテーションのために、基礎文法や発音方法などについて学ぶ。授業では事前準備した学部生のときの卒論の概要とスライドの英訳を修正し、国際学会で使える研究概要とスライドを作成することが目的である。そしてそれらを基に授業最終日である 2 週目の金曜日に、講師や他の参加者の前で英語のプレゼンテーションを行う。授業は概要修正と発表練習のそれぞれの目的に合わせ、テクニカルライティングとオーラルプレゼンテーションに分けて行われる。また授業だけではなく週に一度は企業や大学を課外実習として訪問する。

2.1 テクニカルライティング

テクニカルライティングでは冠詞や前置詞、接続詞などの使い方といった基本的な文法から学び、それらを活かして事前に用意した研究概要の英訳を修正していく。この授業で印象的な点はライティングの授業だが、議論をする機会が非常に多いということである。この授業ではテーマに沿って自分の考えを作文することがあるが、その内容を講師の先生に

提出するだけでなく、学生同士で英語を使って議論する時間がある。例えば「幸せには何が大事か」というテーマでは、なぜ自分がそれを大事と思ったかを実体験を基に議論した。このような時間のおかげで退屈することなく授業を楽しむことができた。

2.2 オーラルプレゼンテーション

オーラルプレゼンテーションでは英単語の音節やイントネーション、さらには文章の区切り方やストレスの付け方について学ぶ。そして、最終的に英語を用いて研究についてのプレゼンテーションを行った(図 1)。またそれまでに自己紹介などの 1 分ほどの簡単なショートプレゼンテーションも行った。初めはこのショートプレゼンテーションでも緊張し、伝えたいことをうまく伝えることができなかった。しかしこのようなショートプレゼンテーションを何度か行うことで、みんなに注目された環境で話すことに慣れることができた。そしてこの授業の良い点はプレゼンテーションを全て各々の携帯電話で動画を撮影するという点である。そして各自その動画を見ることで客観的に自分のプレゼンテーションを振り返ることができる。このシステムのおかげで、私のプレゼンテーションは回数を重ねるごとに改善されたことが実感できた。

2.3 課外実習

RUBeC 演習では、水曜日は課外実習が行われる。第 1 週目は焼結やアニーリングの技術を扱う Thermal Technology 社を訪問した(図 2)。この訪問では、放電プラズマ焼結装置について説明してもらい、実際に動作しているところを見せていただいた。



図 1 最終日のプレゼンテーションの様子



図2 Thermal Technology 社前での一枚



図3 現地で仲良くなった学生との一枚

た。この方法は一般的な焼結方法に比べて加熱と冷却のスピードが速く、更に非常に多くの材料を焼結できるという利点がある。動作時には装置のガラス窓から中の温度が急上昇していく様子が観察でき、それらの利点がよくわかった。専門外の分野で内容を理解することは難しかったが、アメリカの製造現場を見ることができ、非常にいい経験となった。

第2週目は龍谷大学と交換留学提携を結んでいる UC Davis 校を訪問した。UC Davis 校は、農学が盛んな大学で University of California に属する1校である。University of California は10大学で構成されており、私たちが滞在した Berkeley にもこれに属する UC Berkeley 校がある。ここでは在学生による簡単なキャンパスツアーや学部長からの学部紹介があった。全生徒数3万人を超える UC Davis 校の中で院生はおよそ7千人以上で、工学部において院生はおよそ2千人に上ると聞き、UC Davis 校の規模の大きさを実感した。その後は地盤の研究を行っている The Center for Geotechnical Modeling を見学した。ここでは振動テーブル付きの遠心分離装置を使い、地震や波、風、暴風のような効果を模擬的に発生させることによって、地盤への影響を調査していた。装置は最大のもので直径18mほどの大きさになり、UC Davis 校の広い土地があってこそその研究施設だと感じた。

3. アメリカでの生活

RUBeC 演習ではホームステイという形でアメリ

カに滞在するので、アメリカの一般人の生活に触れることができ、刺激的な生活を送ることができた。そのような生活の中で最も印象的だったことは宗教観である。私のホームステイファミリーは老夫婦で非常に信心深いモルモン教徒だった。特にホストマザーは過去にモルモン教のシスターを勤めるほどの方で、私たちは教会や大聖堂などに連れて行ってもらえた。ホストファミリーとの生活は、食事の前には必ずお祈りをし、また日曜日には教会に行くという私たちがイメージする西洋人の生活だった。そしてこのモルモン教のつながりから、私たちは UC Berkeley のモルモン教徒の学生の集会に紹介してもらった。そこでは、モルモン教についての勉強会やバスケットボールなどのイベントがあり、現地の学生と交流することで同世代のネイティブとも会話することができた(図3)。

4. おわりに

RUBeC 演習に参加したことで、ネイティブが話す英語やアメリカの文化に触れることができた。授業では英語の発音や冠詞など今まで意識できていなかった部分を学び、また課外実習ではアメリカの製造業や学生の生活を見ることができて非常にいい経験になった。

今回、RUBeC 演習に引率者として参加して、私たち学生を支えてくださった富崎先生、大津先生、そして小野先生に深く感謝します。